

「蕨の会」真田丸ゆかりの地ツアー“で大阪、九度山へ！ 5月16,17日

◆はじめに 関賢治（2組、「蕨の会」幹事長）

今回の「蕨の会」は真田丸ブームで盛り上がる中、満を持して、昌幸と信繁が幽閉されていた高野山山麓の九度山および大阪城とその周辺など「真田丸ゆかりの地」探索ツアーを一泊二日で開催した。

初日は大坂冬の陣、夏の陣に係る大阪城界隈の史跡探索、夕刻より関西在住者を含めた同期懇親会、

二日目は高野山ならびに九度山巡りの旅となった。

参加者は関東から7名、関西3名（うち2名は懇親会のみ）の計10名。

【大阪城】



HP用のレポートについては、参加者全員がパート毎にリレー形式で作成することになり、序文を筆者（関）、大阪編を牧野泰晴君（1組）、懇親会編を丸山暢久君（4）、高野山編を塩川明男君（6）、九度山編を岡田修君（11）、地元組コメントを山岸敏夫君（11）、総括編を成澤文和君（4、「蕨の会」会長）が、写真撮影と編集を上原昇君（2）が担当した。

ツアーのコーディネートをお願いした大阪在住の山岸君からは、老体にはちょっと尻込みしそうな分刻みの日程表が送られてきた。

ツアー当日の16日は、東京駅8時33分発の「ひかり」に5名が、新横浜から2名が乗車して新大阪に向かった。新大阪駅で山岸君と合流。腹が減っては戦が出来ぬと京橋ビジネス街のレストランで腹ごしらえをして、最初の目的地・大阪城へ向かった。

◆初日、大阪編 レポーター牧野泰晴（1組）

なにわの旨いもんで腹を満たした一行は、関西を熟知する山岸敏夫君の先導で、一路大阪市内の真田丸ゆかりの地を巡る行脚に出た。まず目指すは大阪城である。薄曇りの爽やかな気候の下、若葉が鮮やかな一帯を歩く。異国の観光客で賑わう中、天守閣が黄金色に装飾された城が近づいてきた。

【写真1: 大阪城をバックに】

極楽橋と名うたれた橋を渡る時、日々極楽のような境遇にあることに感謝の念を抱いた。

城の内堀、外堀をへて遠方から改めて城を見やると、若かった頃、訪れた時のことが蘇ってきた。

次は玉造稲荷神社を訪れた。大阪城の鎮守として秀頼の信仰厚かったといわれ、秀頼像が建立されていたが、秀頼が身長190cmを超えていたそうで、小兵で知られた秀吉の子とはとても考えられない思いであった。その後、上町台地に造ら



【写真 2:真田丸顕彰碑前にて】

れたという真田丸の跡、三光神社を目指してひたすら歩く。三光神社近くの大阪明星学園グラウンド前に目的の真田丸顕彰碑があり、皆で記念写真を撮った。玉造駅から天王寺駅まで JR 環状線で移動。大坂の陣で家康、幸村が陣を構えたという茶臼山に登った。

一心寺を経て、幸村終焉の地、安居神社に到着する。閉門の 16 時を 10 分ほど過ぎていたが、特別許可を得てお参りする。日の

本一の兵をいわれた郷土の英雄に接するところが出来た思いで、感慨深いものがあった。地下鉄で本日の宿、ホテルルートイン大阪本町に無事到着した。

成澤会長の万歩計は 2 万 3 千歩を刻んでいたという。



◆初日、懇親会編 レポーター丸山暢久(4 組)

大阪市内の真田ゆかりの地を概ね 24,000 歩で踏破し、高齢の隊員たちにも疲れの表情が見られる頃、宿泊先のホテルに一旦チェックイン後、難波駅近くの居酒屋「郷土宴座」に向かう。

朝からガイドしてくれた山岸君に加え、関西在住の小須田亘君(4 組、高槻市在住、御代田出身)と土屋徳生君(8 組、和泉市在住、小諸出身)も加わり、計 10 名で宴会がスタート。

小須田君は私と同じ 4 組、薬科大学を出て薬剤師の世界に。顔は優しいが空手 4 段とのこと。

土屋君は北大に行ったが、就職は何故か大阪府の職員に。今は古文書研究や書道を嗜む文化人。

ガイド役の山岸君は 25 歳で社内結婚、1984 年から大阪とのこと。ご夫婦ともに旅好きだが、山岸君はサッサと歩いていくタイプなので、奥様から「少しは何かを見たら」と叱られるらしい。

懇親会も佳境に入ると、某氏がスマホから同期 HP 写真集を取り出し、高校 1 年の夏休み頃、新潟の能生海岸へ海水浴に行った時の写真を開いた。そこには同期の麗しき水着姿の女性軍も大勢いるではないか。こうして、初日の疲れを飛ばしたのか加算したのか分からないが、明日の英気を養って、二日目の山歩きに向けて元気に“カイサーン”。

次ページ

【写真 3:懇親会にて、左手前から時計回りで

塩川、岡田、牧野、成澤、小須田、上原、関、丸山、土屋、山岸】



◆二日目、高野山編 レポーター塩川明男(6組)

7時20分、ホテルを出発、山岸君手配の「高野山1day チケット」を手にもう一路高野山へ向かう。難波から南海電車でまず橋本へ。そこでローカル単線電車に乗り換え、後で訪問予定の九度山を通過して、渓谷沿いを山中の極楽橋へと向かう。そこからさらにケーブルカーに乗り継ぎ、860mを5分で上り、ようやく高野山駅着。この間の案内は日本語、英語、フランス語、中国語、韓国語とさすがに世界文化遺産の高野山である。なんとフランス語と思ったが、漢字で書けば仏のご縁というところか。山頂駅でバスに乗り、高野山巡りを開始。入口の女人堂を過ぎると間もなく最初の目的地、真田信之・信政父子の墓所に着く。蓮華定院という立派な宿坊の奥にひっそりと佇んでいる。院の前には六文銭の門灯が掲げられていた。

更にバス移動で奥之院入口へ。そこから弘法大師御廟まで2Kmの道のりを歩き始める。

石畳の参道両側に並ぶ有名大名の墓所を眺め、歴史談義をしながら進む。参道と墓所は1300本の杉の大木群に静かに守られ、まさに日本仏教の聖地と呼ばれるに相応しい佇まいである。奥之院では厳かな気持ちで御廟をお参りする。仕上げは総本山金剛峯寺へ。「一山境内地」といわれ山全てが境内である。秀次自刃の「柳の間」をはじめとする多くの部屋を巡り、立派な石庭とシャクナゲの美しさ后感嘆。そして広間では車座になって、お茶とお菓子の接待を楽しんだ。帰りのバスを待つ間、お土産も買って、九度山へ。

【写真4:高野山 蓮華定院にて】



【写真5:金剛峯寺に咲くシャクナゲ】



◆九度山編 レポーター岡田修(11組)

九度山は高野山への登り口、小さな町である。九度山駅も六文銭だらけだが、町の通りにも「真田のころ 生きる街 紀州 九度山」と書かれた赤い旗、真田十勇士の名前のしおりを下げた赤提灯が家々に掲げられ道案内をしてくれる。真田の抜け穴という伝承になっている古墳の跡だという石造りの小さな穴を過ぎ、駅から15分ほどで真田庵である。門の前に赤いジャンパーに名札を首から下げた関係者っぽい人がいた。この人物、昨年オープンしたばかりの真田ミュージアム副館長で、そうとも知らず気軽に話しかけたのが運の尽き(笑)、真田庵を案内してもらった後、予定になかったミュージアムも見学することとなった。

真田庵は昌幸、幸村の屋敷跡に後から建てられた小さな寺で、当時の屋敷が残っているわけではない。その場所に、今私たちが居るといことが、不思議で特別な感じがする。

近接するミュージアムは、書状の展示や大坂の陣の動画ディスプレイなど視覚に訴える分かり易い展示であった。副館長さんに遭遇できたことはラッキーであった。

おりから西に傾きかけた太陽に照らされて、名残惜しく九度山を後にした。

【写真 6:九度山町でみかけた六文銭、赤提灯】



【写真 7:真田ミュージアムにて】



◆地元コメント編 山岸敏夫(11組)

今回、関東より同期諸氏7名を関西真田丸ゆかりの地訪問ツアーを案内させていただいた。

各自美少年時代の面影は完全に崩れており、私にとって内4名は実質初対面同様であったが、そこは同窓同期であり、すぐに打ち解け楽しい旅となった。個人的には歩くことが好きなので、時間が許さざり徒歩の行程を組んだ。参加各位の協力と、幸い両日とも爽やかな天候、新緑が味方してくれスケジュールの大きな変更もなく無事終了し、心に強く残るツアーとなった。



【写真 8:高野山金剛峯寺で一服】

◆ツアー総括 成澤文和(4組、「蕨の会」会長)

今回の「蕨の会」は記念すべき10回となり、大河ドラマ「真田丸」の余韻が残っている今春に実施ということで、昨秋から幹事の上原君と私とで打ち合わせを行ってきた。ツアーのモデルコースは大阪在住の山岸君に全面的にお任せすることになった。二日間の行程は分刻みで組まれており、内容も大変充実したもので、合計4万歩以上完走したので、私を始め参加者は体力に自信が付いたと思う。素晴らしいツアーを組んでくれた山岸君に改めてお礼を述べたい。

この会も5年前に蕨駅前の関君の馴染みの居酒屋で立ち上げ、今回は2回目の埼玉県外ツアーとなった。今年の予定はあと11月下旬、新座市の平林寺の紅葉見物～サントリービール武蔵野工場(府中市)見学～懇親会となっている。真田関連では、来春に群馬・沼田真田ツアーを、再来年には一泊で仙台真田ツアーを企画している。多くの同期諸兄の参加を願うところである。

【写真 9:高野山参道で成澤君】



【写真 10: 九度山 真田庵にて説明を聞く】



以上 (2017年5月21日、写真&編集 上原)